



第23回 UNESCO-IHP 研修コース 「気候変動下の河川流域管理のための生態水文学」を実施

京都大学防災研究所水資源環境研究センターでは、名古屋大学地球水循環研究センターと共同で、UNESCO国際水文学計画（IHP）短期研修事業（IHP研修コース）を実施しています。研修コースは両センターが隔年で担当し、今回は2013年12月2日から12月13日の2週間にわたり、第23回目の研修コースを防災研究所で実施しました。

今回は「Ecohydrology for River Basin Management under Climate Change（気候変動下の河川流域管理のための生態水文学）」をテーマとし、1）河川流域スケールでの気候変動の水文学的、生態学的影響評価に関する最新の知識を身に付けること、2）水文過程、生態過程の気候変動影響評価の具体的な手順を覚えること、ならびに3）気候変動に対する水文学的、生態学的応答を水資源管理に取り入れる可能性を議論することを目的としました。

内容は、11項目の講義、6項目の屋内演習、1日間の野外実習に加え、1日は琵琶湖から瀬田川を経て、天ヶ瀬ダム・宇治川の現地視察を実施しました。講義は、水文学、気象学、生態学、水資源管理、環境システム、総合土砂管理、貯水池操作など、生態水文学に関係する広範なテーマをカバーし、京都大学防災研究所、京都大学大学院工学研究科、日本気象協会、東北大学、国連大学の教員が担当するとともに、UNESCOのアジア・太平洋支部、アジア・太平洋生態水文学センター、欧州生態水文学センターから外国人講師を招聘し、充実した内容となりました。

演習や屋外実習を除く全講義については、慶応大学のSchool on Internet Asiaを通じて講義映像を海外に一斉配信し、インドネシアなどから多くのアクセスがありました。また、屋内演習では、ノートパソコンにフリーのFortranコンパイラーや可視化ソフトをインストールして、データ解析の基礎、気候モデルデータの解析、河川流域のモデル化、水文モデルや生態モデルによる気候変動影響評価、貯水池操作の最適化について、それぞれ実践的な演習を行うことができました。

今回の研修には、国外よりアジア諸国より来日したUNESCO派遣研修生5名、文科省UNESCO事業支援経費で招聘した研修生7名、JSPSメガデルタプロジェクトから2名が参加しました。また、本研修コースは、グローバルCOEプログラム「極端気象と適応社会の生存科学」のセミナー科目としても位置付けられ、現在京都大学に在籍している留学生や研究者ら10名を加えて、合計24名の参加となりました。

受講生にとって、研究の最前線に携わる現役研究者から直接指導を受けられただけでなく、普段接することの少ない他国の同分野の研究者と交流できる貴重な機会となりました。最終日には、受講者全員がプレゼンテーションを行い、トレーニングコースで得た知識や経験を各国における実務や研究に活かそうという決意が示されました。

